

# 発 達 295

## 主題助詞と主格助詞の動作主性の発達 ：日・韓両言語の比較

○朴媛淑  
(東京大学教育学研究科)

田原俊司  
(東京大学教育学研究科)

伊藤武彦  
(和光大学人文学部)

日本語においてハトガの主題と主格の用法上の区別は、心理言語学的に動作主性という観点からも研究がなされている。ここで動作主性とは、伊藤(1982, *In press*)によれば、「能動文中で、その助詞の名詞句が動作主として選択される蓋然性」である。日本語の場合、2つの名詞句と他動詞からなる単文において、ガの付いた名詞が動作主として選択される率がハのそれよりも高いことが明らかにされている。ガの動作主性がハのそれよりも高くなるのは、ガが他動詞文で主格をあらわす格助詞であるのに対してハは主題提示の助詞であり格関係をあらわす機能を備えていないことしかし、実際の言語運用では動作主にあたる名詞句は主題化されることが多いことから、ハは文法的には格関係を示さないが言語使用経験に基づいた経験的・心理的機能として聞き手に動作主であると解釈させる力があるからである。

また、この助詞ハトガの獲得がかなり遅いことも明らかにされてきている(近藤, 1978; 秦野, 1979; Yoda & Yasaki, 1979; 林部, 1983; 田原・伊藤, 1985)。

Li and Thompson (1976) は、日本語と韓国語を主題と主格の両標識を併せ持つ言語として、諸言語の中で同じグループに分類している。

本研究は、伊藤・田原(1986)の実験と同じ方法を韓国人被験者に韓国語でおこなうことにより、以下の問題を明らかにするものである。第1に、韓国語において主題助詞 *-eun/meun* と主格助詞 *-iga* の動作主性の高さをそれぞれ調べ、両者を比較する。第2に、このような助詞による動作主選択がいつ頃獲得されるのかを明らかにする。以上の2英を日本語(伊藤・田原, 1986)と比較し、両言語の特徴を明らかにする。

### 方 法

4, 5, 6, 8, 10, 12, 14歳と大人各10人ずつ、計80人の被験者に、「名詞(第1名詞)一名詞(第2名詞)一動詞」からなる単文を聞かせ、どちらの名詞が動作主であるかを判断させ、人形や品物を用い動作によって示させた。刺激文は、助詞(3)×語順(2)×意味(3)の組み合わせにより構成された8文型である。助詞の組み合わせは刺激文の中の第1名詞、第2名詞のいずれかの一方に主格助詞のみを用いたもの、主

題助詞のみを用いたものと両名詞に主格と主題の両助詞を用いたもの3通り、語順とは助詞を2つの名詞のどちらに後置させるかで、主格助詞(ただし主題助詞のみを用いる文では主題助詞)を第1名詞に後置させる場合(正語順)と第2名詞に後置させる場合(逆語順)の2通り、意味とは2つの名詞が生物か無生物かで両名詞が生物、第1名詞のみが生物、第2名詞が生物の3通りである。

### 結果と考察

各被験者について8文型ごとに正答率を算出する。本研究では、助詞が一方の名詞にだけつく場合にはその助詞が付いた名詞を、主題と主格の両助詞が付く場合には主格助詞が付いた名詞を動作主と判断したものを正答とする。

(1) 成人における主題と主格の標識 伊藤(1982) Ito (*In press*), 伊藤・田原(1986) は、日本人成人母語話者において、第1に、1文中に主格助詞ガのみが用いられた文と主題助詞ハのみが用いられた文での各々の動作主は、ハトガが両方ある文でのガの動作主性よりも高い、第2に、1文中にハまたはガが単独であられる文の場合でも、また両助詞が出現している文の場合でも、ガの動作主性はハのそれよりも高い、しかし、第3に、1文中にハのみが用いられる文ではハの動作主性が高いという英を明らかにした(Fig.1参照)。この傾向は、Fig.2に示されているように、韓国人成人母語話者における主題助詞、主格助詞の使い分けと一致している。日・韓両言語において、日本語のガ・韓国語の *-iga* は主格の格助詞であるのに対して、ハ・*-eun/meun* は格関係を示す働きを持たない主題提示の助詞であるという文法上の共通性を持つのみならず、主題と主格の標識の使い分けといった言語運用の上でも、日・韓の成人母語話者は同様の使い分けの傾向を持っているということができる。このことは、両言語の文法上・言語運用上の共通性を強く示唆している。

(2) 主題助詞と主格助詞の動作主性の発達 日本語母語話者に対して本研究と同一の方法で実験を行っている伊藤・田原(1986)によれば、いわゆる正語順の文型では4歳で大人の動作主性の水準(あるいはそ

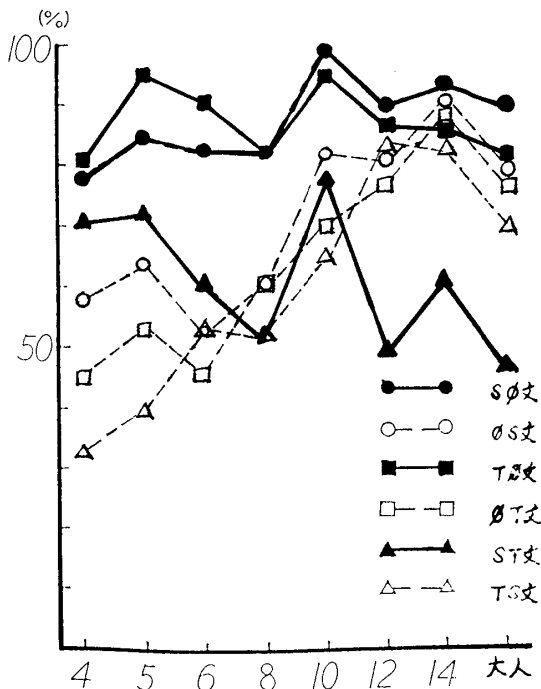


Fig. 1. 各年齢における各文型の正答率 (日本語)  
(伊藤・田原; 1986)

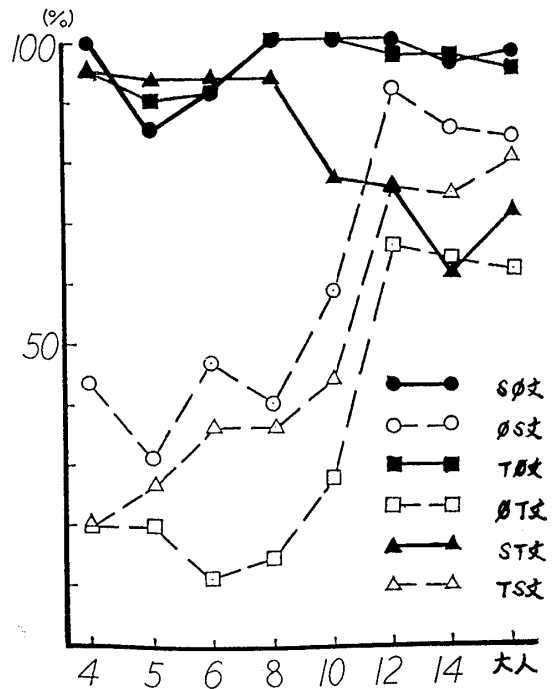


Fig. 2. 各年齢における各文型の正答率 (韓国語)

\*S: 主格助詞 (日本語 -が, 韓国語 -i/ga)  
T: 主題助詞 (日本語 -は, 韓国語 -eun/neun)

れ以上)に達しているのに対して、逆語順の文型で大人と同じ水準になるのは10~12歳頃であった。本研究においては、Fig. 2に示されているように韓国語母語話者は正語順の文型では4歳児で大人の水準に達しているのに対して逆語順の文型では12歳頃であった。したがって、日・韓国言語において語順の影響を受けずに助詞による動作主の選択ができるようになる時期はほぼ同時期であり、両言語とも主題助詞と主格助詞の獲得は極めて遅いといえるであろう。ここにもまた日・韓国言語の共通性を見ることが出来る。

日・韓国言語において主題と主格助詞の獲得が遅れる第1の要因としては、両言語とも、主題と主格の標識が様々な機能を併せ持っているということが考えられる。すなわち、主題の助詞は題目を提示するだけではなく、対照(久野, 1973)、旧情報(田原・伊藤, 1985)などの機能を併せ持ち、主格の助詞は述部に対して主格という格関係を明示するだけでなく、総記(能他)(Kuno, 1973)、新情報(田原・伊藤, 1986)などの機能を併せ持っている。したがって、主題・主格の標識の表層形式と機能が1対1対応していなかったために獲得が遅れると考えられる。獲得の遅れる第2の要因として、日・韓国言語とも主題と主格の標識が省略可能であるということをおげることが出来る。すな

わち、助詞は必ず用いなければならないという標識(obligatory marker)ではないために、動作主決定などの際、文法的な手がかりとしての相対的な強さにだけ意味や語順などの他の手がかりが最初利用される(Hayashi, 1975; 岩立, 1980)ため、その獲得の時期が遅れると考えられる。

本研究の結果は、日・韓国言語は言語構造が似ているだけでなく、言語運用においても共通性があることを強く示唆するものである。韓国語成人母語話者においては、主題と主格の助詞の動作主の選択の様式が日本語成人母語話者と共通するパターンであった。発達的にみると主題助詞と主格助詞を語順に左右されず動作主選択の手がかりとして正しく理解できる時期は12歳であり、日本語の助詞いとかの獲得の時期と似て遅く、両言語とも、主格助詞と主題助詞の真の意味での獲得が遅いということが示された。

【文献】

伊藤武彦・田原俊司 1986 ハとガの動作主性の発達。  
パン F. C.・八代京子・秋山高二(編)ことばの多様性, 87-106, 文化評論出版,